

次期長野県食と農業農村振興計画の地域別振興計画の方向

木曾地域振興局

タイトル	<p>第1期：ブランドを育てブランドで輝く木曾の農業・農村（H20～H24）</p> <p>第2期：地域で支え合い、育む木曾ブランド（H25～H29）</p> <p>第3期：木曾らしく、農業の個性を高め、伝統食で人をつなぐ（H30～R4）</p> <p>第4期：(仮) 伝統とイノベーションを融合した木曾農業の発展（R5～R9）</p>
------	---

項目	内 容
取組状況と主な成果	<p>●現計画における取組と主な成果</p> <p>I 木曾農業を支える経営体と人材の確保・育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規就農者（H28）8人→（R3）13人 ・定年帰農者（H28）6人→（R3）12人 <p>II 木曾農業ブランドの「御嶽ハクサイ」「木曾子牛」の生産振興</p> <ul style="list-style-type: none"> ・御嶽はくさい出荷量（H28）38.3万ケース→（R3）30.6万ケース ・御嶽はくさい出荷額（H28）4.6億円→（R3）4.3億円 ・一戸当たりの木曾子牛出荷頭数（H28）5.47頭→（R3）5.74頭 <p>III 特色ある「稼げる」農業の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・販売額1千万円以上の園芸品目（H28）8品目→（R3）5品目 ・米の一等米比率（H28）63%→（R3）79% <p>IV 木曾の本物を味わう食と食しかたの提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GIすんきの製造量（H28）37.7t→（R3）27t ・6次産業による商品化数（H28）7品→（R3）11品目 <p>V 住民参加による元気な村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野生鳥獣による農作物被害額（H28）17百万円→12百万円 ・荒廃農地の解消面積（H28）22ha→（R3）13.2ha ・中山間直接支払事業活動面積（H28）389ha→371ha ・多面的機能支払事業活動面積（H28）346ha→（R3）271ha <p>VI 元気な村づくりのための農地の条件整備と農村資源の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生産性を高める農地の条件整備（H28）814ha→（R3）820ha ・小水力発電の設備容量（H28）2.4kw→（R3）34.4kw ・観光資源として整備する農業施設数（H28）0箇所→（R3）2箇所

主 な 課 題	<p>I 木曾農業を支える経営体と人材の確保・育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業者数の減少による生産減、農地の荒廃化（リタイヤ農家（農地）の受け皿不足に対応する、新規就農者及び移住定住者数の確保育成。 <p>II 木曾農業ブランドの「御嶽はくさい」「木曾子牛」の生産振興</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はくさい農家の高齢化による生産減少を補うため、労働負荷軽減対策や生産性向上対策の定着化。高温や豪雨による作り難さの解消。 ・木曾子牛生産農家の高齢化・生産減少を補うため、規模拡大と ITC 活用等の定着 ・資材、飼料高騰下における更なるコスト低減、 <p>III 特色ある「稼げる」農業の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園芸作物栽培農家の高齢化による生産減少を補うため、新規栽培農家の育成確保 ・米の需要減少、機械装備の老朽化、資材価格等の高騰、高温対策等 <p>IV 木曾の本物を味わう食と食しかたの提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統食材の更なる PR、アフターコロナ時代に合った商戦の活性化 ・多様化する消費者ニーズと食品産業の変化が進んでいる。また加工従事者、原料生産者等の確保育成、原材料コスト等の上昇による収益性向上。 <p>V 住民参加による元気な村づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リタイヤ農家（農地）の担い手への農地集積と、集落協定等農村機能の維持継続。 ・荒廃農地解消、野生鳥獣軽減対策の解消面積、被害額の減少、スマート化 ・中山間農業直接支払い及び多面的機能支払いの継続に向けた、つながり人口の強靱化、農村型地域運営組織「農村 RMO」等の新しい農村運営の検討 <p>VI 元気な村づくりのための農地の条件整備と農村資源の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頻繁化した豪雨災害により損壊した、圃場や取水施設等の早期復旧と強靱化。 ・ゼロカーボン戦略への小水力発電等の更なる推進。 ・農業施設の観光資源化と地域観光と連携した観光プランの魅力向上
農 業 農 村 の 特 徴	<p>木曾川本支流沿いの農地は高低差が高く区画も狭く、水稻、そばや飼料作物を中心に農業が営まれている。木祖村、開田高原には圃場整備された優良農地が広がっており、夏季の冷涼な気候を生かした、“御嶽はくさい”を代表する高原野菜やソバの産地となっている。また古くから“木曾子牛”として全国に供給する産地である。</p> <p>日本遺産として登録された各種景勝地を支える飲食店、道の駅直売所等では地元根付いた伝統の食文化として特徴的な作物栽培（ソバ、すんき、赤カブ、えごま等）を推進している。</p> <p>基幹的農業従事者は高齢化が進展し、新規就農も少なく、減少が続いている。</p>

I 多様な担い手が支え合う木曽の農業・農村

- ・担い手への農地集積や、新規就農者が円滑に農地の確保を行える「農地利用計画」が作成されて農地の有効活用がされている。

・

II 木曽ブランドを支える産地づくり（土地利用作物、園芸品目、畜産）

- ・消費者ニーズに応える「御嶽はくさい、木曽牛」産地に多様な担い手が活躍している。
- ・地域に根差した飼料生産と、新たな技術（スマート技術等）を導入した安定的な畜産（子牛出荷）が行われている。
- ・多様な担い手に即した新たな品目の拡大が図られている。（野菜・花き・特産）
- ・実需者が求める品質・数量の米、そばが生産供給されている。

III 観光と連携した伝統食材の安定供給（食の地産地商・食の継承）

- ・木曽地域を訪れる観光客等をおもてなしする飲食店や直売所、加工所と連携した、伝統的食材が安定的に生産供給されている。

・

IV みんなが生き生き暮らせる、持続可能な農村づくり

- ・DXの進展によるテレワークの拡大や、移住者の半農半X、定年帰農等による多様な担い手が増え、農村地域とかがわりあいが強まっている。
- ・木曽の伝統食材に触れ、農業農村の大切さを将来につなげる活動が行われている
- ・自然災害や野生鳥獣被害の少ない安全安心で豊かな農村環境（景観）を維持している。

- I 多様な担い手が支えあう木曽の農業・農村
- 人・農地プラン、地域計画（農業経営基盤強化法）活性化計画（農山漁村活性化法）の策定による計画的な農地の利用・保全（計画数）
R3：22プラン → R9：22プラン 既存プランからの移行
 - 町村、JA、広域連合と連携した就農者・移住者等、多様な担い手の確保育成（新規就農者等の就農人数）
R3：3人/年 → R9：15人
- II 木曽ブランドを支える産地づくり（土地利用作物、園芸品目、畜産振興）
- 御嶽はくさい、木曽牛の安定生産の推進
栽培面積の維持（指定野菜産地強化計画より）
R3：50ha → R9：45ha
木曽子牛出荷頭数
R3：5.74頭/戸 → R9：6.0頭/戸
 - 推進品目の選定による作付け面積の増加（管内花き・花木類の栽培面積の増加）
R3：（調査中） → R9：
 - 米の1等米比率の向上
R3：78.9% → R9：90%
- III 観光と連携した伝統食材等の安定供給（食の地産地商・食の継承）
- 伝統食材提供店舗数の増加（木曽牛、すんき、そば）
R3：（調査中） → R9：（調査中）
 - 伝統野菜等の栽培面積の維持確保（赤カブ、えごま等、木曽の味の振興）
R3：（調査中） → R9：
- IV みんなが生き生き暮らせる、持続可能な農村づくり
- 中山間直接支払事業活動面積（面積の維持）R3：371ha → R8：371ha
 - 多面的機能支払活動面積（面積の維持）R3：271ha → R8：323ha
 - 野生鳥獣被害額の減少（被害金額の減少）R3：12.8百万円 → R8：10.8百万円(10%減)
 - 農地整備課の計画（整備面積）R3：819ha → R8：829ha (10ha増)